シンポジウム

2023年度シンポジウム司会報告

司会　辻内　宣博

シンポジウム企画の趣旨において提示したとおり，初年度にあたる2023年度は，「トマス・アクィナスに疑義を呈す――中世における神学と哲学――」と題して，中世スコラ哲学のいわば〈内部〉から，すなわち，トマス・アクィナスと同時代の人たちから，アクィナスの哲学および神学に対する疑義を呈してもらい，その疑義に対してトマス・アクィナスの側から応戦する論戦を行なった。

全体の進行としては，次のような形で進めた。まず，大会二日目の午前中に，「連動報告」として，アリストテレス哲学が西欧に流入する以前の「創造論」に関して，ニュッサのグレゴリウス，エリウゲナ，アンセルムスが「無からの創造」をどのように論じていたかを，藤本温氏に報告してもらった。

そして，同日午後からは，「シンポジウム」本体として，まずは，アラビア哲学とアルベルトゥス・マグヌスの視点から，「創造論」をめぐる疑義を小林剛氏に呈してもらい，次に，フライベルクのディートリヒの視点から「聖体論」をめぐる疑義を山崎達也氏に呈してもらった。最後に，トマス・アクィナスの視点から，両方の疑義に対する応答を川添信介氏に行なってもらった。以上の提題者たちの議論の詳細については，後の報告を参照していただきたい。

その後，「質疑応答」に関しては，まずは，提題者同士の間での質疑応答，とりわけ，疑義を呈した小林氏と山崎氏から，応答を行なった川添氏への質疑応答が行なわれた。そして最後に，会場から質問用紙を回収して，提題者と会場との質疑応答を行なった。時間配分に問題があり，大会会場校の上智大学にはご迷惑をおかけする場面があったものの，会場の方々から寄せられた質問12件すべてに対する応答を行なうことができたのは，

大変ありがたいことであった。また，大会終了後も，提題者たちと大会参加者たちとの間で，熱気冷めやらぬ様子で引き続き活発な議論が行なわれ，全体としては，大変な盛り上がりを見せたシンポジウムであったと思われる。

以下では，会場の方々から寄せられた質問のうち，提題者たちの提題内容の核心を突くと思われるものを二つ採りあげてご紹介したい。

一つ目は，川添氏（トマス・アクィナスの立場：「神の第一原因性」に関する三つのフェーズの区分）に対する質問である。「理性によって論証され，信仰によって保持される」（ratione demonstratur et fide tenetur）という対比を考えるとき，13 世紀の学芸学部の教師であり，急進的アリストテレス主義者であるブラバンティアのシゲルスやダキアのボエティウスの議論は，両者の間には若干違いはあるものの，「自然学者として」（ut naturales）語るとき，理性で語れる領域を限定することは，同時に，理性では語れない理性的探求の外側の領域を位置づけることでもある。そうすると，こうした領域の区分けそれ自体を哲学が行なうと言えるのであれば，アクィナスとの違いはあるのか，違いがあるとすればどういったところか，というものである。

二つ目は，小林氏（アラビア哲学，アルベルトゥス・マグヌス：「第一質料の創造」に関する哲学的理解の不可能性）と山崎氏（フライベルクのディートリヒ：「基体と付帯性」の分離不可能性）に対する質問である。現実世界にある「秩序」（τάξις）がいかにして生まれたかということの根拠を探求するとき，その根拠にもしかるべき「秩序」があるはずであるが，その根拠の側の「秩序」については，理性の範囲内では知解できないのかもしれない。しかし，厳密な意味での理性の領域という限界を突破していくときには，「理念」（Idee）が必要であり，こうした「理念／イデー」を内包する形で合理性の限界を突破して不合理の領域へと進むのが「哲学」だという見方もあるのではないか。そうすると，哲学と神学とを截然と分けるのではなく，神学的／理念的／（狭い意味での理性から見た）不合理な要素を内包した形での「哲学」という見方はできないのか，というものである。

これらの質問に対する提題者たちの解答については，後の提題者たちの報告を読んでいただき，色々と考えをめぐらせていただければと思う。ただ，いずれにしても問題の核心となっているのは，結局のところ，われわれが研究している「哲学」という知的な営みとはいったい何なのか，そして，どういったものとして定位するべきなのかということであるように思

われる。また，この位置づけを単に概念的／理論的なレベルで留めるのではなく，実際に個別的な論点に落とし込んでみるとき，また違った姿が浮かび上がってくるのかもしれない。一枚岩で一括りにされがちな「中世の哲学／神学」において，その内実を探ってみると，きわめて豊饒で多様な「哲学／神学」の姿が立ち現われることを示せたことは，本シンポジウムの一つの成果ではないかと企画者としては考えている。